

## 発達障害をもつ児童の自発的会話行動の促進 環境設定、教示、支援ツールの効果の検討

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
障害・行動分析クラスター  
猪島 彩

本研究は、発達障害をもつ子どもが仲間との相互交渉を成立させ、自発的な会話行動を促進させる条件を検討するために、仲間との相互交渉が多く生起する協力型のゲームを設定し、ゲームにおける仲間の発話に対する相槌や返答など（以下、相槌行動）の教示や支援ツールを用いた支援を行った。

「相槌行動」教示条件では、ゲームを行う前に「あったか言葉、チクチク言葉」の教示と指導員によるモデリングを行った。「相槌行動」支援条件では、ゲーム中に支援ツールとして「へえボタン」を導入し、自分の声ではなく「へえボタン」を使って「相槌行動」ができる物理的な環境を設定した。

結果、「相槌行動」教示条件では、参加児の他児に対する「相槌行動」は一時的に増加したが、ゲームの後半になるに連れて消失する傾向を示した。他児に対する自発的な発話の生起数にも大きな変化は見られなかったが、他児に対する「要求」に加え、「提案」や「助言」など、他児の意向を確認しようとする発話が新しく生起したことから、発話に質的な変化があったと言える。「相槌行動」支援条件では、「へえボタン」の導入によって、教示条件に比べ「相槌行動」が大きく増加し、また、ほとんどの参加児の他児に対する自発的な発話の生起数も増加し、「相槌行動」教示条件で生起した「提案」や「助言」などの発話も多く生起した。

以上から、「相槌行動」支援条件における支援ツールは、「相槌行動」を増加させることに有効であり、「相槌行動」が増加することによって、多様な参加児同士の自発的な会話行動を誘発させ、仲間との相互交渉が促進されると言える。

発達障害をもつ子どもにとって他者との関わりを持つ上で障害となるものは、他者の考えや話すことなどについて想像し、予想することができないことであると言われ、このような障害は、他者と関わる上での大きな不安となる。「へえボタン」は、そのような障害をもつ子どもにとって、相手との間にいくらかの距離を置き、相手の反応を確認しながら相互交渉を行うことができるという点で他者との相互交渉における安心感を与えたと考えられる。